

より密接な地域医療連携をめざして

地域医療連携室

Office of Community

だより

VOL. 4

こんにちは！産婦人科です

～県下の周産期・婦人科医療の拠点として～

産婦人科／総合周産期母子医療センター
小林 浩

日頃は貴重な症例のご紹介を賜り、誠にありがとうございます。当科は開院と同時に診療を開始し、現在に至るまで産婦人科領域の全ての疾患を24時間体制でお受けする県下の拠点病院として活動させて頂いています。この10年ほどの間、多くの奈良県外への母体搬送、救急に応需できなかった事例などがクローズアップされ、ここに全国的な産科医の不足が重なって、産婦人科の情勢につきましては関係者の皆様や県下の先生方に大変ご心配をおかけ致しました。そのような中でも暖かい励ましを頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

その後、行政の方でも委員会を立ち上げて頂き、当局のご尽力による度重なる増床と新生児科を含む体制の整備、また志ある医師・助産師が徐々に増えたことで、県外への搬送率はここ数年で徐々に減少し、救急に応需できない例も少なくなりました。更に、県下の産婦人科開業医の先生方にもお願いして、全国的にみても画期的な一次救急輪番システムを運用頂いており、これによって医師の負担がかなり軽減されるようになりました。重ねて御礼申し上げます。

現在の当科は21名の医員で、産科・婦人科・メディカルバースセンター(平成23年開設)を合計すると90床を超える病床を運用しております。周産期領域では日本周産期・新生児学会(母体・胎児)専門医が在籍し、産科救急以外にも他科との積極的な連携による合併症妊娠への対応、また超音波専門医による胎児診断にも尽力しています。婦人科疾患については婦人科腫瘍専門医に加え、内視鏡専門医や尿失禁のエキスパートも精力的に診療しており、おかげさまでいずれの分野においても県下を代表する診療実績を誇っております。

産科救急症例ばかりがクローズアップされがちですが、正常分娩、胎児診断、合併症妊娠、婦人科腫瘍、女性のヘルスケアにいたるまで、大学病院の使命として産婦人科領域における全ての疾患に応需させていただきます。今後とも県下の周産期医療、婦人科診療における不動の拠点として努力してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



■診療日、担当医師 (平成24年1月現在)

	月	火	水	木	金
1 診 (初診)	小林	佐道	古川	大井	野口
2 診	古川 (婦人科腫瘍)	交代制 (婦人科)	春田 (婦人科)	棚瀬 (婦人科)	交代制 (婦人科)
3 診	植栗 (産科)	野口 (産科)	小池 (産科)	成瀬 (産科)	佐道 (内分泌・産科)
4 診	永井 (婦人科)	成瀬 (産科・婦人科)	赤坂 (婦人科)	吉田 (不妊相談・婦人科)	小池 (産科・婦人科)
専門外来 (予約制)			女性ヘルス ケア	子宮 内膜症	



地域医療連携室初診予約枠についてはお問い合わせください

地域医療連携連絡協議会のご案内

この協議会は、奈良県域にある医療機関で、地域医療連携の実務に関わる医療職及び事務職担当者によって構成し、次の基本的な考え方により運営しています。

〈平成23年6月29日発足〉

- ◇地域の医療連携を効率的かつ効果的に進めることを目的とします
- ◇希望があれば新規入会は自由で、また、退会も自由です
- ◇現在、「脳卒中部会」「肺がん部会」を設置。今後、地域連携バス等に関わる各種部会を設け、講演会、意見交換会等の開催を予定しています
- ◇他の部会への、複数参加も自由です



	会員施設
脳卒中部会	山の辺病院、西大和リハビリテーション病院、平成記念病院 奈良県総合リハビリテーションセンター、阪奈中央病院、辻村病院 奈良医療センター、西の京病院、済生会御所病院
肺がん部会	平成記念病院、平尾病院、土庫病院、西の京病院、済生会御所病院、 吉野病院、済生会奈良病院、済生会中和病院、奈良県立奈良病院

将来的には、県内の「各協議会」等との交流や情報交換などを行い、連携バスの標準化ができればと考えています。また、「在宅医療」をテーマに開催した、第6回地域医療連携懇話会の反響が大きく、今後「在宅医療部会」の立ち上げを検討しております。

興味・関心をお持ちいただけましたら、どのようなことを実際行っているか体験参加いただくことも可能です。

医療機関相互の連携を推進することで、情報の共有や課題を検討する有益な機会を得ることができると考えています。多方面の医療機関の方々のご入会をお待ちしております。

医療情報検索システム登録のお願い

当院に通院されている患者さんを地域の先生方と連携し、フォローしていくため医療情報検索システムの登録を行っております。

当院での検査や治療終了後は可能な限り紹介元医療機関やかかりつけ医へお戻りいただいておりますが、患者さんの状態によっては専門性のある医療機関に紹介する場合があります。この場合、医療情報検索システムを活用しております。適切でスムーズな紹介ができるシステムを推進するため、登録医療機関を募っております。本趣旨にご理解・ご賛同いただけましたら登録へのご協力よろしくお願いたします。



第6回地域医療連携懇話会 開催報告

平成23年10月1日(土) 午後2時より奈良県立医科大学蔵書館にて、第6回地域医療連携懇話会を開催いたしました。今回はシンポジウム形式で「在宅医療を支えるシステム」をテーマに今後の在宅医療についての課題・展望について貴重なご意見をいただきました。

119名という非常に多くの方々にご参加をいただき、いかに在宅医療が各方面から関心をもたれているかを再認識するとともに、今後の連携の重要性を改めて実感する機会となりました。



シンポジストの感想



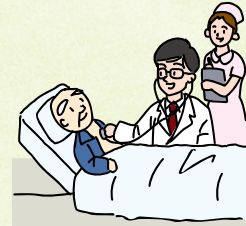
「訪問診療の立場から～在宅医療に関わるメッセージ～」

明日香村国民健康保険診療所 所長 武田 以知郎

私は日常診療と在宅医療を行う一般的な診療所の医師として、往診(訪問診療)に関する話題を提供しました。訪問診療の始まりをブーメラン型(かかりつけ医→紹介入院→退院→訪問診療)、落下傘型(病院通院→入院→調整の上退院→訪問診療)、爆弾型(入院→入院中止→帰宅→訪問診療)、ゲリラ型(突然要治療の方を発見→訪問診療)などで分類すると、ブーメラン型が最も理想的と言えます。私の地域では大きな病院をかかりつけにしている方が多いために爆弾型が多いのですが、医大で退院調整カンファを経て在宅看取りをさせていただいた落下傘型ケースは貴重な経験となりました。訪問看護師やケアマネなどの多職種での連携も在宅ケアを支える上で、患者さんやご家族様の安心に繋がると感じています。以上の経験から

次のことを奈良医大に期待します。

- ・病状の安定している患者さんを逆紹介し、地域のかかりつけ医を持ってもらう
- ・退院前カンファランスなどの事例を積み上げる
- ・退院後も地域で安心して過ごせるシームレスな連携(地域連携パスや情報共有化)
- ・多職種連携の仕組みづくり
- ・医療と介護の情報共有化を推進するためにクラウド(情報の外部共有)の導入検討



「がん診療における在宅医療の立場から」

ちゅうわ往診クリニック 院長 河田 安浩

10月1日に地域医療連携懇話会ということで、「在宅緩和ケアにもっと参加してほしい」「顔が見える関係が大事」とお話しいたしました。在宅緩和ケアは医療依存度が非常に高く、医療関係者であっても在宅では困難ではないかと思える方が多いのです。しかし、その方を中心として、生活に溶け込んだ医療・介護を創り上げる必要があると思われます。そのような場では、「いかに信頼できる関係か」が非常に重要です。そのために顔が見える関係が必要不可欠です。

懇話会の後には徐々に問い合わせが増え、「病院では帰れないと言われたが、本人が帰りたいので何か方法はありますか?」というように、少しずつ在宅緩和ケアについての理解が得られていると感じています。

今後、病院ベッド数の増加は見込めませんが、老年人口は増えていきます。つまり自宅で最期をすごす方が増えていくのです。この地域が在宅緩和ケアを必要とする方にとって安心して暮らせる地域へと進化していくためにご協力をお願いいたします。



「訪問看護の立場から～第6回地域医療連携懇話会に参加して～」

社団法人奈良県看護協会立権原訪問看護ステーションかもきみ 所長 伊藤 絹枝

地域医療連携懇話会に訪問看護の立場から参加させていただき、訪問看護の現状と今後の取り組みについてお話ししました。

在宅の先生方・訪問介護・基幹病院の地域連携の立場からの話を聞かせていただき、さらに在宅医療・看護・福祉の連携を深めていくことの重要性を認識しました。

奈良県内の訪問看護ステーションは小規模の事業所が大半です。訪問看護サービスの安定的な供給を維持し、必要とされる訪問看護を提供するためには、県内の訪問看護ステーション間の連携を図り、ステーションの機能を強化していくことが課題です。

今後も病院・在宅医・介護サービス・福祉施設・行政関係者の方々とよりよい関係を築き訪問看護の役割を果たしていきたいと思っています。

「訪問介護の立場から～在宅医療に関する寄せることば～」

有限会社在宅介護センターさくら 代表取締役 湯澤 美代子



第6回地域医療連携懇話会に参加させていただき有難うございました。

ご来場の人数が多かったことは、医療連携への期待と関心が大きい証ではないでしょうか。

ご本人やご家族の想いから住み慣れた家で療養したい、最後を迎えたいと望んでおられる方は多くおられます。その一方で①緊急時の往診ドクターが少ない②何時でも訪問できる訪問看護、訪問介護の体制が整っていない③家族の介護負担が大きい等、在宅医療に対する不安があります。先日、ご利用者の退院時にケアマネジャーとしてカンファレンスに参加させて頂きました。ご家族は勿論のこと、主治医を含めた病院スタッフと在宅スタッフ総勢11名の会議で、それぞれの役割から有意義な意見交換ができました。その後、介護者となる方から「退院にあたり不安で仕方なかったけどこうして話を聞かせてもらい私一人で介護するのではない、皆が支えてくれるのだ、という気持ちになれた。何かあったら相談もできるし、安心しました。」と、お言葉を頂き、正に武田以知郎先生がおっしゃった「お互いの顔の見えるチームケア」の成果の一つであり、この実践が在宅医療を支える「架け橋」となり不安の軽減につながると確信致しました。

「基幹病院の立場から～第6回地域医療連携懇話会その後～」

奈良県立医科大学附属病院 地域医療連携室 栗田 麻美



地域医療連携懇話会では、院内の退院調整システムと退院調整に関わる課題について、報告させていただきました。当院は特定機能病院であり、地域の基幹病院としての役割を果たすためには、急性期に特化した医療の提供と、地域の医療・保健・福祉へとしっかりと繋いでいくことが重要と考えております。

今回のシンポジウムの後、出席された関係機関の皆さまから、医療依存度が高い在宅療養者が“安心して在宅を続ける”ためには、レスパイト入院や緊急時の入院受け入れ、情報共有のシステム化についてのご要望やご意見を多数頂戴いたしました。改めて急性期病院として次の療養の場に医療を繋ぐだけでなく、地域の関係機関のネットワーク化やシステム化を通じて地域完結型医療の実現を目指すべく、医療依存度が高い療養者の地域ネットワークシステム（地域連携クリティカルパス）を検討していきたいと考えています。

最初は対象や地域を限定し、実情を踏まえ関係機関の皆さまと共に考えながら作っていきたいと思います。ご意見やご提案等お待ちしております！

第7回地域医療連携懇話会

日 時：平成24年3月1日（木）18:00～20:00

場 所：奈良県立医科大学 厳櫃会館（3階大ホール）

テーマ：「奈良県の周産期医療ネットワーク



構築のための地域医療連携」

奈良県立医科大学 産婦人科学教授 小林 浩

多数の方の参加をお待ちしております